

## 4 近世日本における服飾の美意識（第1報）

### —上方風と江戸風—

お茶の水女子大 小寺 三枝

1 ある時代に生きた服飾の美は、一度は姿を消したかのように見える時でも伝統的な美意識の流れの中に残るものである。ここで近世の服飾を取り上げるのは、それによって現代に追求される美の根底をなす流れの一つを知る事になると思うからである。

2 服飾がその当時のどのような美意識に支えられていたかを知る為には、染織技術上の資料としての遺品と共に絵画や文学作品等の副次的な資料を必要とする。ここでは主として当時の小袖雛形や文学作品における表現によって調べた。

3 元禄頃の小袖雛形や西鶴の作品の中では服装がどういう「物好き」であるかという事が屢々問題にされる。その場合の幾つかの物好きは物珍しい着想に終始する個々の世界を形作っているに過ぎないかのように感じられる。しかしそれらを総括すれば正に上方風の美の

世界が明確に示されていて、そこにはより美的な着想を求め得る可能性が蔵されている。後期の服でこれらの物好きと対置される江戸風の好みは「いき好み」であろうが、そこには新しさもさる事ながら、着想の可能性を超えて到達した美の世界がいつ迄も保ち続けられている。そして上方風の好みが寛文模様を表われた文学的情緒の流れを汲む自然描写的な文様染や鹿子染などの中に現われ、江戸風の好みが縞や無地物に現われるのを見る時に両者の性格が一層明らかになると思う。